

研究発表 2

中国帰国生徒の言語教育について

中国帰国生徒とは

今泉 現在東京都立光丘高校に勤務しております。私の発表する内容が本日の全体テーマの流れに関わっているかどうかちょっと不安なのですが、それを発表し、ご批判を得たいと思います。

まず、中国帰国生徒とはどういう生徒なのかということですが、勤務校では平成3年度から中国帰国生徒を一般生徒とは違った受け入れ方式、具体的にいえば一般生徒とは別な試験を実施して受け入れています。東京都教育委員会の規定では昭和20年の終戦時点で中国大陸に残されたいわゆる残留孤児とか残留婦人の二世または三世の中で引き上げ時点でおおむね小学校4年以上であった生徒を指して「中国帰国生徒」または「中国帰国子女」と呼んでいます。私どももその呼称を使っております。いわゆる帰国子女という名前を持っていても、本人や両親が基本的には日本人である“海外勤務者の子女”というのとは違う存在です。

都立高校の受入状況

次に都立高校の中国帰国生徒の受け入れの現状をお知らせします。現在都立高校では12校が受け入れています。そのうち10校が全日制普通課程、残る2校が商業で、一つは工業、一つが商業であります。勤務校、光丘高校ではトータルで30名の募集枠があるのですが、13人しか埋まっておりません(表)。恐らく12校の都立高校の受け入れ校のうちで定員を満たしているという学校は1、2校だろうと思います。うちなどは標準からやや下位かと思います。必ずしも定員枠を越えるほど希望者が多いというわけではないのが現状です。

言語指導の目標

次に取り出し授業に関連して、中国の帰国生徒に対する言語指導についてお話ししたいと思います。中国帰国生徒は、全員が「残留孤児」や「残留婦人」の二世または三世です。彼らは「中国帰国生徒」と呼ばれていますが、自らの意志で「帰国」したわけではなく、内実は移民に近い存在です。従って彼らに対する言語教育の基本は異文化適応の観点を踏まえた、第二言語としての日本語教育であると同時に、日本の高等学校に進学してきた彼らにとっての目標言語の日本語は高校生レベルの「国語」で、こうした意味において中国帰国生徒に対する日本語指導は「日本語教育」と「国語教育」のはざまにあります。本校では国語科が一応中心となりまして、その任に当たっています。

異文化理解を視野に入れた取り出し授業

中国帰国生徒に対する言語教育の基本は異文化適応の観点を踏まえた第二言語としての日本語教育でありまして、第二言語教育と異文化理解教育は密接な関係があります。こうした異文化理解教育の観点からも国語科以外の教科も積極的に参加した総合的な日本語教育指導の体制が望まれます。

中国帰国生徒は全員が中国語を母語としております。彼らに中国語学習の機会を与えることは彼らの人権を認めるばかりではなく、日本語教育を援助することにも繋がります。既習内容が一般の生徒と著しく異なる教科については個別指導が必要です。以上のような観点から勤務校では前にお示ししたような取り出し授業、彼らだけの授業を国語科のみならず、普通教科にわたってもやっております(表)。1年次は多く2年、3年と少なくなるという形です。

今年度私が担当している中国帰国生徒の授業はそれぞれ週3時間の1年と2年の「古典」です。年度当初、授業を始める前に各生徒の学力や生活環境を調べますが、有力な資料として状況説明書というものがあります。それは、だいたい中学校の先生が書いてくださった資料です。そのほかに、入学願書、いわゆる入学試験の結果(一般生徒とは別の国語と数学の試験)がございます。その他入ってからのプレースメントテスト、個別面談等の成績などから、彼らのいわゆるニーズとレディネスを分析いたします。教材は共通のものとしては一般学級と同一の教科書を使っています。個別には、生徒に合わせて日本語教育の教材も使っています。6名以内の取り出し授業で学習者個々人の学習力などに留意しつつ、音声・文字・語彙・文法等の指導を行っております。

中国帰国生徒の日本語力

次に学習者に見られる傾向についてですが、帰国生徒と接していると、帰国したのが小学校4年生頃で日本の生活も長く、一般生徒と見分けがつかないような流暢な日本語を話し、日常生活はほとんど日本語に頼って生活しているが、「古典」や「中国語」をはじめとする多くの教科の成績が本校では合否すれすれという低空飛行の生徒も見かけます。彼らは、カミンズ(Jim Cummins)(資料)という人のことばを借りれば「基本的対人伝達能力(Basic Interpersonal Communicative Skills)」は発達している。別の表現でいえばサバイバル日本語はできるが「認知・学習能力(Cognitive Academic Language Proficiency)」が停滞しているようです。彼らは母語である中国語での思考力が未発達なために、第二言語である日本語においてもサバイバル日本語はできるけれども、思考力を要する学習が伸び悩むのではないかと推測されます。このような生徒は「セミリンガル」ともいうようですが、日常語はできるけれどもどちらも不完全、中国語も日本語も駄目というような生徒がいます。

これに対して日本での生活経験が2、3年と大変短くても、第一言語である中国語がしっかりしている。そのために日常会話は多少ぎこちないけれども思考力を要する教科は順調な者もいます。

母語の保持

「古典」と「中国語」の成績の相関度は非常に高く、深い。そして「数学」や「英語」との相関度も高いように見えます。母語の中国語の保持と発展が望まれる理由の一つもこの辺にあるのではないかと思います。本校では「英語」の時間を一部割いて、5単位の内の2単位を「中国語」に充てています。家庭でも日常会話レベルでは中国語が使用されていますが、込み入った、高度なものになるとちょっと中国語のブラッシュアップは家庭では望みにくいと思います。また、日本社会での中国語に対する評価は多少上がったとはいえ、とても英語には及ばないこともあって、彼らの中国語の保持発展はなかなか難しいです。

言語習得の臨界期とアイデンティティ - の問題

次に言語習得の臨界期ということですが、林部英雄先生（資料 ）という方や、他の方も述べていらっしゃるのですが、いわゆる「言語の確立期」というのがあるのではないかと、どうやらそれは小学校3、4年生の時期にあるらしい、ということのようです。その説が、私の受け持っている生徒を見ていると、非常にピッタリあてはまる者が何名かあります。常識的ではありますが、彼らがいつ頃帰ってきたかということが結構大事なことで、但し、彼らはそれは自由に選べないわけですから、彼らをなんとかサポートしなければいけないと思っております。

いわゆるアイデンティティというのにもそれに密接に関係があるような感じであります。私の感じでは「君、中国で学校はどこまでいたの。」と尋ねて、生徒が「中学校です。」というのを安心します。高校だと特に安心します。問題を起ささない、授業についていけるなと思うからです。アイデンティティについても帰国時が小学校4年生前後が非常に危ないところだと思います。

日本人の異文化に対する意識

次に異文化授業ですが、手短かに言えば日本人はやはり異質なものを認めにくいという傾向があるように思います。私の中にもあるのではないかと思います。よそ者は排除する、日本に来たのだから日本に同化するのが当然、という思いが無言のうちにあって、彼らの問題行動などの一因にもなっているような気がします。

最後に中国帰国生徒の教材開発、日本語教員の養成、母語の保証、ネットワーク作り等帰国子女と外国人子弟の言語教育のために関係行政当局をはじめとする皆様方の一層の援助とご助力をお願いしたいと思います。以上です。

西川 ありがとうございます。かなり性格の異なった二つの機関の現場の報告をお聞きいただいたのですが、このあとディスカッションに入りたいと思いますが、その前にこの二つの異なった現場の報告をつなぐような意味を含めまして、東京女子大学の上野さんの方から「帰国子女と外国人子弟の言語教育」というテーマでコメントをいただきたいと思います。

表 在籍状況

学年	男	女	計
1	2	2	4
2	1	5	6
3		3	3
合計	3	10	13

表 取り出し授業

学年	1	2	3
週時数	19	10	2
場所	選択教室(3F)	選択教室(5F)	選択教室(4F)
科目	現文、古典、現社 数、数A、英R、 中国語(英G)	現文、古典 英、 中国語(英W)	中国語(英W)

資料 カミンズ (Jim Cummins) は第一言語と第二言語との関係を人と自転車との関係で比喻した。

車輪が一つでも、行きたい所に行ける。 <モノ(mono)リンガル>

一輪が大きく、もう一つの一輪が小さくても、行きたい所に行ける。 <ドミナント(dominant)パイリンガリズム>

二輪とも大きければ、もっとよく行きたいところに行ける。 <アディティブ (additive)パイリンガリズム>

両輪ともよくなければ、どこへも行けない。 <セミ(semi)リンガル>

竹長吉正『帰国子女のことばと教育』より

資料 林部英雄 (89) の発言

小学校 1、2 年生はまだ完全に臨界期の内であり、その時期から新たな言語 ここでは日本語 の習得を開始すれば、完璧な習得ができるであろう。それに対して、小学校 5、6 年では臨界期が終わっており、もうそれまでに習得された言語が新たな言語によって影響を受けることはない。小野博の言うとおり成人になってから外国語を習得するのと同じなのである。小学校 3、4 年頃はちょうど臨界期が終わりかける過渡期的な時期であり、その時に新たな言語の習得を開始すると混乱をきたしてどっちつかずになってしまうのは理解できる。